

「この毎日は全てのお年寄りからの贈り物」

郡山市立高瀬中学校 3年 小林 綾莉

「老人は社会のお荷物」そんな言葉をインターネットで見かけた。私はとても衝撃を受けた。そして、とても悲しかった。

今、私たちは日本という国で、平穏な日常を送っている。ご飯を食べ、学校へ行き、安心して眠りにつき、また昨日と同じように目を覚ますことができる。残念なことだが、世界中の全ての国がこうではない。では、このような平穏な毎日を送れる日本をつくりあげたのは一体誰だろうか。

私は、毎年終戦記念日に黙祷をする。今年も戦争で亡くなった方々に黙祷を捧げた。毎年その瞬間に思うのは、戦争で荒れ果ててしまった当時の日本の姿。そして、そこから復興するのはどれだけ大変だっただろうか、ということだ。私が生まれた時には、既に日本は便利で清潔で平和で過ごしやすい国だった。誰も何もしなければ、日本はずっと戦後の姿のままだったはずだが、今の日本があるのは、昔の人たちが一生懸命に未来を創ろうとしてくれたおかげだ。昔の人たちの努力や苦労があってこそ、今の私たちの暮らしがある。

また、自分がこうして生きているのは、先祖代々、脈々と命のバトンを私まで繋げてくれたからだ。その過程で誰か一人でも欠けていれば、私はここに存在することはできなかった。私が小学六年生の時、私の曾祖母が亡くなった。お葬式には大勢の親戚が参列した。私は周りを見渡し、もし曾祖母がいなかったら私はここにいなかったらろうし、ここにいる親戚たちとの繋がりもなかったのだろう、と改めて思った。この場にいる親戚は曾祖母がつくった「ファミリー」なんだなと思い、曾祖母への敬意と感謝を深く感じた。曾祖母は農家をしていた。とても長生きをして、百五歳まで生きた。曾祖母は戦争を経験している。戦後、日本が少しずつ復興していく過程も経験している世代だ。私が生まれた時には、既に認知症になっていたため、そういう話を直接聞くことはなかったが、私が曾祖母に会いに行くと、いつも歓迎してくれ、にこにこ笑顔で歌を歌ってくれたり、頭を撫でてくれたりした。大切に大好きな曾祖母だった。いつも、帰り際に別れの挨拶とともに手を握るのが習慣だった。曾祖母の手には深いしわが沢山刻まれていた。それは、曾祖母が百年以上の長い歳月を、苦しいことも大変なことも乗り越えて生きてきた人生そのものを表しているようだった。戦争や戦後間もない時代をも乗り越えてきた手は、小さくて、しわ

しわで、そして、とても温かかった。本家の周りには、曾祖母が耕していた畑や田んぼが一面に広がっている。その田畑は曾祖母のあの手によって耕されたのだ。そしてあの手で子供たちを育て、命が孫へ、そしてひ孫である私へと繋がったのだ。曾祖母は、決して世に名を残した人ではない。オリンピックに出たり、人生が本になったりはしていない。でも、曾祖母が作った米や野菜を食べた人がこの世の中にきっといるだろう。そして、そんな誰かの命がまた別の誰かに繋がっている。ミスターチルドレンというバンドの「彩り」という曲がある。自分がしたなんでもないことが、回り回って誰かのことを笑顔にし、役に立っている、という内容が歌われている。私はこの曲が大好きだ。社会を築き上げているのは、有名人や偉い人だけでは決してない。曾祖母のような人たちが、それぞれの場所で社会に、生活に貢献している。きっと社会をつくっている多くの人、曾祖母のように決して本にはならない市井の人だ。そういう人たちがそれぞれに懸命に生きて、私たちの世代まで命のバトンを繋いでくれたのだ。

新型コロナウイルスが流行した頃、テレビでは亡くなった人の人数が連日報道されていた。それを見て、死者数を単なる数字と錯覚してしまいそうになった自分に驚いた経験がある。私は自分の想像力のなさに深く反省した。数字ではないのだ。人なのだ。その一人一人は誰かにとっての大切な人なのだ。だから、自分ができる我慢はしっかりと、予防に努めなければ、当時そう思った。高齢者も同じである。ただの「高齢者」や「老人」という記号なんかではない。少し想像力をはたらかせれば、自分の祖父母や曾祖父母と同じように、全ての高齢者の方々も誰かの大事な人で、私たちが生きる「今」をつくってくれた人だと分かる。自分の祖父母や曾祖父母に対する優しさを、同じように見知らぬ高齢者にも向けられる世界であってほしいと思う。そして、この「今」をつくってくれた高齢者の方々へ、今度は私たちが、彼らが安心して暮らせるためには何をすべきか考え、実行する番だ。それが「今」というプレゼントを私たちにくれた高齢者に対するお返しだと思う。

老人はお荷物なんかじゃ決してない。「今」という素敵な贈り物をくれたサンタクロースだ。私はそう思う。